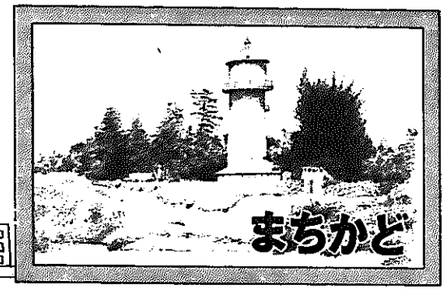


出荷も終わり、現在は冬期せんていや土壌耕うんを行う

こんにちは

苦労が実って農林水産大臣賞に

五幣正樹さん（下赤渋・農業・52歳）

県園芸産地拡大推進運動の一つとして、本年度から始まった果樹高生産共進会（日本ナシ部門）で、下赤渋の五幣さんが最優秀賞に選ばれ、農林水産大臣賞に輝きました。

五幣さんは、昭和三十一年ころに、親から稲作と果樹との複合経営を受け継ぎ、本格的にナシ栽培に取り組み始めました。その後四十四年に、出稼ぎで事故に遭って右手を失い、目も失明に近い状態で、栽培をあきらめかけたことも。

「仕事面でたいへん不自由し、最初は自分との闘いでした。ここまでやってこれたのは、ナシ作りの先輩や妻の協力のおかげです」と、当時を振り返ります。五十年から市の身体障害者協会の役員に。

「自分は障害者なんだと思うと、何もできません。障害者自身が目を開き、やる気を出さなければ…」と話します。

再起した五幣さんは、ナシ専作経営に切り替え、現在の規模は、日本ナシ五十五㌃を中心に、ブドウ六㌃、水田十㌃、畑五㌃です。

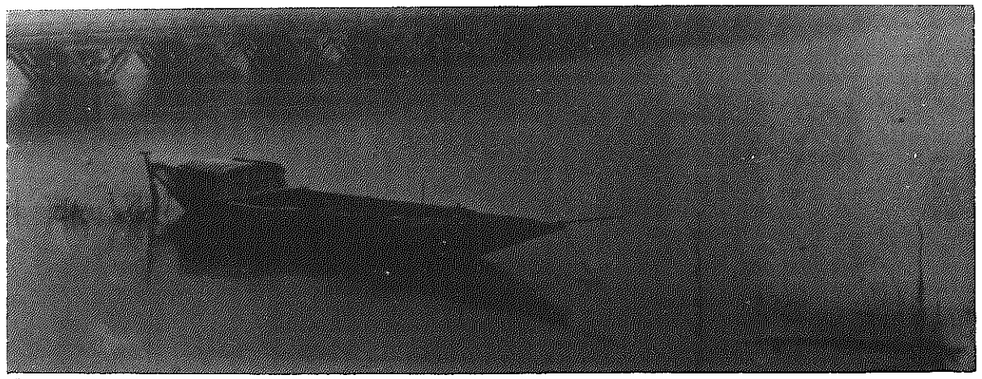
「小手先だけでは、決して良い成果は得られません。基本技術を大切にし、自然の節理を考えた栽培を心がけています」。老木でも収量を落とさないようにするため、これまで特に、樹齢五十年という「二十世紀」の古木の若返りに、力を注ぎ、実績を上げています。

また、四年前から一部を品種更新し、来年から生産に入ります。

「地区でも『二十世紀』中心の栽培から、新品種の割合を増やす計画です。切り替えには時間がかかるので、それまでは今ある『二十世紀』を大事に生かしながらやっていかなければ…」と、計画作成委員として検討に加わる五幣さんです。

「障害者でいながら大きな賞をもらい、重みを感じています。今後も皆さんといっしょにがんばっていきたい」

時の流れで様変わり



上の写真は、松原さんが撮影（上＝29年3月、下＝28年10月）

語る人　松原和夫さん＝（五四）（白井）

私の思い出　昔のわが街

信濃川のほとりで生まれ、川の流れと景色を見続けて五十有余年になります。川の流れは変わりませんが、時の流れによるほとりの様変わりは、やむをえません。

遠くに守門、粟ケ岳、近くに護摩堂山と続く上流の山並みは、四季、日々、同じようですが毎日見ていても見飽きません。

川水は清く、橋の下の石場で洗いものをしながら談笑する人。暑い盛りに水遊びや昼寝の幼児連れ。夏の橋の下は暑さ知らずの天国でした。投網を一回打たないと寝れないと、毎晩通う人もありました。

川を上下する舟も、手こぎ、動力船と進歩しましたが、下の写真のように帆掛け船もたまに見えました。私の見た最後の船は、どこからどこへ行ったのでしょうか。その上の写真は、二年に数回しかない深い霧に浮かぶ古い臼井橋と、増水に浮かぶ砂採り船です。このような情景は、もう見られません。

自根人物伝

★大関剣峯（おおせきけんぽう）

儒者。白根の人で、字は俊佐、剣峯は号である。善軒の子で、七歳の時、父に従って江戸に出、長じて亀田鵬谷の門に入り、学資がなく、家僕となって苦学した。

後田安家に二百石で仕え、まもなく小石川に塾を開き、慶応三年（一八六七年）に招かれて上総（千葉県）九十九里に行き、明治の初め、東京に帰って再び教授するかたわら著述をした。著書には数種あり、先師の学を述べ、国体を明らかにし、皇道を説いたものである。

★渋川釣雪（しぶかわちょうせつ）

大郷村の庄屋である。字は子遠、釣雪は号。別号を小桃源主人といった。

僧の雲洞に学び、博覧で知られた。喜んで文士と交わり、谷文晁、立原杏所らと親交があった。余暇には詩を賦し画をかいた。

（以上、北越詩話から）

「私の思い出　昔のわが街」欄へあなたの思い出の場所を。連絡は企画財政課広報広聴係へ。